

茶莖(茶皮)を白鳥に給与した結果と知見

大 森 常三郎

はじめに

白鳥の「えさ」としての茶がらの発端は瓢湖にあると思われる。それが全国に、口伝えに、白鳥の大好物は「茶がら」として流布されて今日も続いている。

この茶がらを給与すること、または、嗜好性については日本白鳥の会においてもしばしば取り上げられたことである。

しかし、ここでとりあげる茶莖(茶皮)とは、生産過程において異質のものである。即ち、茶摘みの際、新芽は莖ごと刈りとられるが、その後葉をとりさった莖の部分である。

これを入手するに至った経緯は、故・中村忠次氏が同好の知人であった狭山の田代甲子雄氏から、白鳥は茶がらを食うなら茶屑も食うだろう。ひとつ試してくれないかと話をうけたのは1975年に遡ることであった。そして翌年、数個の包みが送り届けられてきた。これが端緒となつてか、狭山では猪苗代湖の白鳥を守る会の協力会が誕生し、強力な支援組織となつたのである。

1. 給与した時期 昭和53年2月12日～27日 3月11日～

2. 給与量 コハクチョウ約250羽に対し50Kg

3. 給与した茶莖の含有成分 (埼玉県茶業試験場)

茶莖(茶皮)の成分

(1) アミノ酸含量(mg%)

リジン	12.6	ヒスチジン	10.2
アルギニン	136.9	アスパラギン酸	94.8
セリン	106.9	テアニン	774.8
グルタミン酸	128.3	アラニン	19.5

その他 イソロイシン ロイシン フェニルアラニン バリン など

(。印=必須アミノ酸を含む。アミノ酸含量は粉茶の場合は2~3%少ない)

- (2) 色素類 クロロフィルを含む
- (3) 粗繊維 約10～15%前後
- (4) ビタミンC 約100mg前後
- (5) タンニン酸 10%前後
- (6) カフェン 2%前後
- (7) 灰分 5%

(8) 茶がらの場合は上記成分の中、水溶性の部分は殆んど溶出し、不溶性成分が残ると考えられる。

4. 給与結果の概要

(1) 嗜好性

給与第一日、茶特有の香気か、鮮緑の色彩のためか、一寸逡巡をみせたが、間もなく食い尽し、第2日以降は気にしなかった。

(2) 排尿の状態

給与後、正常屎（淡緑色の固形屎）がみられ、従来酷寒期によくみられた衰弱鳥の水溶性下痢便はみられない。（屎の色調、淡緑色は鳥類における病的な所謂緑便ではない）葉緑素（クロロフィル）によるものである。

(3) 一般状態

前年同期には多くの落鳥をみた時期であり、酷寒と猛吹雪が相次いだにもかかわらず落鳥はなく、また採餌の際、集合できない衰弱鳥もなく越冬できた。

5. 考察およびまとめ

茎茶給与の結果からみると、長い冬季間において湖底に自生する藻類も食いつくし、あるいは雪の下となり、葉緑素を含む餌は渴望しているのではなからうか。

排便の状態が正常にして下痢を来さないことについては、タンニンが有効に働いていることも考えられる。また、活動性が良いことは栄養はとにかく、カフェインの効果であると思う。

序上の結果と知見から、猪苗代湖における酷寒期越冬餌料として有効適切、得難い餌として今後に期待したい。

おわりに、この多量の茎茶の提供を戴いた入間市茶業協会会員諸氏に深甚なる感謝の意を表す。